

## 青年期における自己対象化と存在論的危機

堤 雅 雄\*

Masao TSUTSUMI

### Self-Objectification and Ontological Crisis in Adolescence

#### 序

水面に映った己が姿に魅せられて、ついには池に沈み、水仙となって甦ったというナルシスの神話は、我々にいったい何を語りかけているのだろうか。

水鏡に映し出された自己の像との出会いは、彼に「見る自己」と「見られる自己」とに引き裂かれた自己の現在を覚知させ、それが、2つの自己の統合をはかる、入水という行為に向かわしめた。

そのような逸話として解すると、我々はそこに現代の青年の姿を重ね合わせてみてとることが可能となる。

鏡に向かうとか、カメラの前に立つとかの状況におかれると、自己意識の覚醒化 (self-awareness) といわれる心理的現象が生じる。このような事態では、自己評価の低下、即ち自己否定化傾向がみられるという研究がある (Ickes, W. J., Wicklund, R. A., & Ferris, C. B., 1973)<sup>1)</sup>。

青年期とはまさしく、自己意識の昂まりと、それと相即しての、自己を映し出す鏡たる他者の存在に対する意識の昂まりをその特徴とする時期である。そこにはナルシスの、自己にとっての危機的状況が予感される。

#### I. 青年期の危機

文学の世界では、青年期は古来、しばしば「疾風怒濤」の時期として描かれてきた。

精神分析理論の多くも、青年期を不安と混乱の時としてとらえてきている。

例えば、Freud, A. (1958)<sup>2)</sup> は、青年期を基本的に平穏な成長が阻害される時期であり、この時期に平衡状態を保ち続けていることの方がむしろ、内的な不安を外的に表わしえぬ、発達への偏りであると論じている。

また、Erikson, E. H. (1968)<sup>3)</sup> が、青年期をアイデンティティの危機として記述していることもあらためて言うまでもない。彼のいう crisis とは、誰しもが必ず越えていかざるを得ぬ、人生の峠の意である。

恐らく、多くの人は自らの青年期を省みて、そこにナルシス的な自己愛と自己嫌悪、孤独と愛、自立と依存といった、一見矛盾する二極の間を揺れ動く自己を見出すのではなかろうか。

しかし一方で、近年、主として調査や面接資料をもとにした実証的研究において、青年期の危機の一般性を否定する議論が多数出されてきている (Weiner, I. B., 1970)<sup>4)</sup>。多くの若者が、平穏で健康的な精神生活を送っていることもまた事実のようである。

この2つの対照的な見解は、恐らく青年へのアプローチの違いが反映されたものであろう。一方が個別的・質的な分析に基く、危機の普遍性の指摘であるのに対し、他方は、集団的・量的分析に基く、危機の一般性の否定である。恐らくは、いずれもが事実であり、現代の青年は、意識の表層レベルでの平穏と、深層レベルでの葛藤を併せもっているであろう。

青年期の危機を考える際に、この時期に好発する精神病理を資料にするのも有効であろう。その代表的なものが精神分裂病と対人恐怖症であろう。

分裂病（寡症型）の初発年齢はほぼ大学生段階に対応し、対人恐怖症の好発時期はほぼ中学・高校生段階に対応していると考えられている。

また対人恐怖症は、山下 (1977)<sup>5)</sup> によれば、全体の約9割が10代前半から20代前半にかけて発症し、しかも10代後半の発症が全体の半数近くを占めている。そしてその多くが、30代に入ると症状の軽減をみるのである。

対人恐怖症の心性の、より一般的なあらわれである「羞恥心」や「人見知り」といった現象も、思春期以降

\* 島根大学教育学部教育心理学研究室

の青年にとって極めて一般的であるのもまた周知の事実である。

内沼 (1978)<sup>6)</sup> は、躁うつ病が「他人が地獄となる」疾患であるのに対し、精神分裂病は「自分が地獄となる」疾患であり、また両者の中間に位置する対人恐怖症は、「自分も他人も共に地獄となる」疾患である、と述べている。対人恐怖症とはまさしく、「自分と他人の存在論的な等価性を端的に示す疾患である。」

青年期の危機の極北にあるのが「自殺」であるが、これについてはどうか。

近年、自殺の若年化が騒がれているが、そのピークはやはり老年期と共に青年期後期 (20代前半) にある (岸本, 1980)<sup>7)</sup>。しかも青年期の自殺が、実存的色彩を帯びていることは、他と比べて特徴的である。

なお、対人恐怖症は欧米諸国では殆んどみられないものであり、青年期の自殺率の高さもまた同様である。これらの現象は比較文化的意味で興味深いものであるが、恐らくこれらは、日欧の人間存在様式を反映した、自我形成過程の差異によるものであろう。

以上のように見てくれば、青年期の自我が、存在論的な意味で危機的状況にあると考えるに十分な根拠がありそうである。「自己」と「他者」の間で、あるいは社会的諸関係に基く多数の自己への拡散の中で、青年は真の自分というものを見失いがちになる。「自分とは何か」という問いは青年にとって痛切な響きをもっているのである。このような意味での青年期の危機は、真に自立した人間となるための、必要かつ有意義な試練である。

## II. 自己の対象化

人は「私」というものの実在性を、ほぼ直観的に確信している。にも拘らず、我々はそれに対してあまりにも無知である。「私」とは一見自明でありながら、また極めて不明である。それはあたかも、それ自体は見ることはできず、常に何ものかに反映して初めて可視的となる、光のごときものである。

しかも、このような自分を明確に意識化・対象化する機会は意外に少ない。

例えば、「おまえは何者だ?」とあらためて問われた事態を考えてみよう。恐らく多くの人はこの奇妙な問いに対して一瞬戸惑いを感じるだろう。敢えて回答を試みても、自己表現の内容の貧しさと、核心に触れえぬもどかしさに辟易することであろう。

このようにして、述語として語られる自己 (James,

W. のいう “the me”) は、その殆んどが他者の存在を前提として初めて成り立ったもの、あるいは社会的役割を荷ったものである。

これらの断片的な自己をいかに綱羅しても、本来的な自己は現れない。それは、もはや「私は私だ」、「私は他の何者でもない」と語るしか表現の術はない。この、述語となりえぬ私 (James のいう “the I”) は、中核的自己として、雑多な自己の混沌の中から結晶化してくる、恐らくは言語表現を越えた「私」である。

心理学ではこれまで、この対象化された自己を「自己概念」(self-concept) として、またそれに対する評価的態度を「自己評価」(self-esteem) として、実証的研究の対象としてきた。この種の研究は思いがけず多数だが、そのうち今回の議論の文脈に沿うものを幾つか紹介してみたい。

### 自己概念

Dixon, J. C. & Street, J. W. (1975)<sup>8)</sup> は、6才から16才の被験者に、42項目の対象について自己 (self) と非自己 (not self) に同定させた。その結果、自己同定項目は加齢と共に増加し、彼のいう「自己拡大」現象がみられた。この自己領域の拡大は、その後の同一性拡散 (Erikson) を招来し、その統合が課題となることを予期させている。

Livesley, W. J. & Broomley D. B. (1973)<sup>9)</sup> は、7才から14才の被験者の、“myself” についての記述を分析して、次のような自己記述カテゴリーの変化を見出した。まず、一般に、外面的情報に関するカテゴリーは、加齢と共に減少し、内面的諸特性、自己と他者に対する基本的哲学や態度に関するカテゴリーが増加した。即ち、発達に伴い、自己固有の内的、心理的過程に覚醒すると同時に、社会性、即ち他者がいかに自分を評価するかについて意識的となる。青年は個としての存在であると同時に、集団の一員でもあるというアンビヴァレンスの中にあって、自己のアイデンティティの個性の維持を欲している、と彼らは語っている。

「おまえは何者だ?」(Who Are You?) という問いをそのまま被験者にぶつけ、しかもそれに対する答を20コ要求するのが、Kuhn の20答法 (TST) である。

この20答法を用いた研究は、その歴史の割にそれほど多くないが、その中で Montemayor, R. & Eisen, M. (1977)<sup>10)</sup> は、平均年齢9.8才から17.9才の被験者のTSTにおける自己定義内容を30カテゴリーに分類した。結果にあらわれた年齢の変化は、前述の Livesley

らとほぼ同様の傾向を示した。Montemayerらはこのことを、Wernerにならい、具体から抽象への表象様式の発達とし捉えている。なお、彼らの研究において特に注目されるのは、自己の「実存性・個性」カテゴリー(ex「私は私だ」)の反応の増加傾向である。

### 自己評価

Musgrove, F. (1966)<sup>11)</sup>は Montemayerらと同様に、TSTをイギリスのグラマースクールの生徒(1級と6級)に課した。彼はまず、その記述内容の感情価によって、肯定・否定・中性の3つに大きく分け、その上でさらに19の下位カテゴリーに分類していった。その結果で特に注目されるのは、自己に対する肯定的記述、否定的記述の相方の大幅な増加傾向である。しかも6級では否定記述の方が肯定記述を上まわっている。自己否定的記述は6級で男子22%、女子24%の高出現率を示している(肯定記述はそれぞれ17.4%、15.5%)。なお、否定的記述の内容は、主として、他者による排除や、所属集団の欠如に関するものである。この自己に対する批判的な態度は、被験者がグラマースクールというエリート校の生徒であることに大きく困っているということを示している。やはり注目すべき事実である。おそらくは、自己対象化の深化が、このような自己批判的傾向を生み出したのであろう。

しかしながら、自己評価に関する他の多くの研究では、一般にこのような年齢の変化は認められていない。自己評価は比較的恒常であるという(Wylie, R. C., 1979)<sup>12)</sup>。

また同時に、人は一般に、他者との比較において、自己を過大評価する傾向があるともいわれている。多くの人は、自分を、他人に比べればましな方だと思っている、というわけである。この傾向をWylieは“self-favorability bias”(自己好意的偏向)と呼んでいる。勿論、この自己に対する相対的評価は、絶対的評価と同一であるとは限らない。しかしながらこの2つは、基本的に通底しあっていることも否定しえない。

欧米の研究では、自己否定性は、しばしば現実自己(real self)と理想自己(ideal self)のずれとして語られている。しかもこのずれは、適応の指標となるとみなされることが多い。

Katz, P. & Zigler, E., (1967)<sup>13)</sup>は、このずれ(self-image disparity)を5年生(10才相当)から11年生(16才相当)にわたって測定し、ほぼ一貫した増大傾向を見出している。しかしそのずれに適応性との関係はみられず、ずれの増大は認知的能力の発達に伴う

ものと考えられている(Katz, P. A., Zigler, E. & Zalk, S. R., 1975)<sup>14)</sup>。

また、高校生以降、老年期までの変化については、Hess, A. L., & Bradshaw, H. L. (1970)<sup>15)</sup>が、I. S.の一貫した高水準化と、R. S.の青年期における落ちこみを見出している。

以上の結果を総合すると、恐らくI. S.は加齢に伴って一貫して上昇していくのに対し、R. S.は青年期において低下する。このことから、青年期は他の年齢と相対的に自己否定的となることがうかがわれる。

理想自己は、キリスト教的西歐文化における自我形成においては、極めて重要な概念だが、「恥」の文化といわれることのある我が国、あるいは東洋の和合価値的文化では、むしろ他者の自己への評価の方がより心的実在性を有すると思われる。これをLaingにならって、Meta-Identityとして捉えていってみたい。

### Meta-Identity

自己の拠って立つ基盤たる他者存在に対してより明確に意識化させるのがLaing, R. D., Phillipson, H. & Lee, A. R., (1966)<sup>16)</sup>の相互人格の知覚理論(IPM)であろう。

自分の眼で自分の姿を捉えることはできない。それは他者という鏡を通して初めて可能である。

私が何者であるかは、他者が私をどのように捉えているかによって大きく規定される。逆にその相手もまた私が彼をどう見ているかに規定される。自己のidentityは、自一他の相関性の中であらわれくるのである。

そのような考えから、Laingらは、identityに次のような水準をおく。

Self Identity (SI); P→P

Meta Identity (MI); P(O→P)

Meta-Meta Identity (MMI); P{O→(P→P)}

(P; 自己, O; 他者)

前回筆者は、SIとMI、SIとMMIの連関性を、中学生、高校生、大学生それぞれのグループ内の分布において分析し、それを自己のidentityの、他者への依存と自律という観点から議論した(堤, 1978)<sup>17)</sup>。

心理学においては、これまで、自己認知(SI)、他者の自己に対する認知(MI)、及び実際の他者の自己に対する認知(仮にPI; Public Imageと呼ぶ)の相互関係性についての研究がいくつかみられる。

例えば、Orpen, C. & Bush, R. (1974)<sup>18)</sup>は、平均

年齢 16.8才の被験者14名に対する測定によって、SI (self image) と MI (Predicted image) 間の高い相関と、SI と PI (Public image) 間、及び MI と PI 間の相関の低さを見出している。

また、Teichman, M. (1972)<sup>19)</sup>は、一般群の SI-MI の高相関に比して、非行少年 (12才~15才) での相関の低さ (ほぼ無相関) を見出している。もしこれが事実なら、SI と MI のずれは社会的適応の 1 指標となりうることになる。少なくとも SI と MI のずれが、心理的に何らかの葛藤を引き起こすことは大いに予想されることである。また、このずれと自己否定観との間にも一定の相関関係が存在する可能性がある。この点を次の実験で確認してみたいと思う。

### 実験 I. IPM 型質問紙と SCT においてみられる自他の認知と自己に対する態度

#### I. 目的

青年期の自我の存在論的危機は、まず、自己及び他者に対する否定的態度として表われると考えられる。この自・他に対する評価的態度を、文章完成法テスト(SCT)によって測定してみたい。

また、この自他に対する否定的態度と共に、危機は、自己意識の昂まりに伴う「見る自己」と「見られる自己」、「偽りの自己」と「真の自己」の亀裂に基く、存在論的不安としてあらわれる。このことを IPM 型質問紙によって測定し、併せて、2つの質問紙間の関係をみることにする。

#### II. 手続き

##### 1. SCT

刺激語は、精研式 SCT より、中学生用、成人用に共通し、かつ今回の目的に適う項目を選び、計38項目からなる SCT を編成した。詳細は以下の通り。

1) 自己関連項目：私はよく人から、時々私は、私はよく、私の服、私の頭脳、どうしても私は、私の顔、もし私が、私が残念なのは、私が羨ましいのは、他。計26項目。

2) 家族関連項目：私の父、私の兄弟 (姉妹)、家では、私の母、家の人、他。計6項目

3) 友人項目：友だち。

4) 学校項目：学校では。

5) その他：世の中、争い、他。計4項目。

反応はまず、記述対象によって、主として自己に関す

る記述 (S)、他者に関する記述 (O)、及びその他に分類した。次に記述内容に関して、肯定的記述 (+, +)、否定的記述 (-, -)、中性的ないし両価的記述 (?) のいずれかに評定した。評定は6人の心理学専攻生の合議に基いてなされた。評定が分かれた場合には、? 反応とされた。

記述対象は、刺激語によって一義的に決定される訳ではないが、結果的に被験者の多くが、刺激語に対応する対象についての記述を行っていた。従って最終的には、自己に対する態度は自己関連項目で、他者に対する態度についてはそれぞれに対応する刺激語項目で見ることとし、評定段階についても、当初の5段階から、肯定・否定・中性の3段階にまとめられた。

##### 2. IPM 型質問紙

IPM 型質問紙は、3段階のパースペクティブレベル (SI, MI, MMI)、4種の性格特性 (まじめさ、明るさ、やさしさ、頼もしさ)、及び、MI, MMI における類推の対象他者3名 (母親、友達、先生) の組み合わせによる、計28項目によって構成される。

反応は、はい、いいえ、どちらともいえない、の3ポイントで、無記名で求められる。

得られたデータは、次のような形の個人指標に変換される。

$$ds-M = \sum |x_{SI} - x_{MI}|, (0 \leq ds-M \leq 24)$$

$$ds-MMI = \sum |x_{SI} - x_{MMI}|, (0 \leq ds-M \leq 24)$$

$$D = ds-M - ds-MMI, (0 \leq D \leq 48)$$

( $x_{SI}$ : 各項目における SI 評定点,  $x_{MI}$ : MI 評定点,  $x_{MMI}$ : MMI 評定点)

##### 3. 被験者

被験者は以下の通り。

中学生：公立中学校3年生、男子19名、女子20名、計39名

高校生：公立実業高校2年生、男子14名、女子25名、計39名

大学生：国立大学教育学部2回生、男子9名、女子25名、計34名

以上計112名。

#### III. 結果と考察

##### 1. SCT にあらわれた、自己に対する態度

自己関連項目計26項目における自己肯定的記述項目数 ( $0 \leq P \leq 26$ )、自己否定的記述項目数 ( $0 \leq N \leq 26$ )、自己肯定度 (肯定項目数 - 否定項目数:  $-26 \leq P - N \leq 26$ )

の平均値を表1に示す。

まず、肯定項目数(P)は、最高の中中学生女子でも1.70と、全体にかなり小さい。少々乱暴だが、おおよその傾向をみるため、項目数を指標に、非加重平均法によるANOVAを試みてみると、年齢要因にのみ有意性がみられた( $F_{2,106}=6.01$ ,  $P<.01$ )。これは主として、中学生から高校生にかけての減少による。

次に、否定項目数(N)をみると、大学生女子の7.40を最高に、Pに比べてかなり高い値をとっている。PにならってANOVAを行うと、性、年齢、交互作用のすべてに1%水準での有意性がみられた( $F_{1,106}=33.02$ ,  $F_{2,106}=17.87$ ,  $F_{2,106}=10.67$ )。変数変換による検定ではこれよりやや大きな危険率になる可能性があるが、有意水準が非常に高いため、この結果はほぼ信用に足るであろう。交互作用は、男子の中一高間、女子の高一高間、及び大学生の男女間に有意差がみられなかったことによる。仮に、女子高校生が男子に比べて心理的に早熟だとみなしうるならば、この結果全体は、心的発達に伴って自己の否定的側面の対象化が進むことを意味していると解し得る。社会性の発達に伴う認知的脱中心化は、青年をして、自我防衛的機制を起えて、自己の文字どおりにみにくい側面に直面させる、といいかえてもよいであろう。

ちなみに、自己否定的記述の多かった刺激語(上位3位)は、中学生では「私の顔」、「時々私は」、「私の頭脳」、高校生では「私の頭脳」、「私が羨しいのは」、「どうしても私は」、そして大学生では「私が残念なのは」、「どうしても私は」、「私の頭脳」、「時々私は」の各項目である。「私の顔」以外は、いずれも肯定反応は殆んどみられなかった。(下線を付した項目は、各群に特徴的な項目である。)

P, Nの総合としての自己肯定度(P-N)は、すべての群で負(自己否定)を示し、その全体的傾向は、Nとまったく同様であった。ANOVAの結果は、性( $F_{1,106}=21.43$ )、年齢( $F_{2,106}=21.00$ )、交互作用( $F_{2,106}=7.20$ )のすべてに1%水準で有意性がみられた。交互作用は、Nと同じく、男子の中一高間、女子の高一高間、及び大学生の男女間に有意差がみられなかったことによる。

Nの場合と同様に、もし高校生の女子の方が男子より心理的な発達が早いとみなしうるならば(その可能性は極めて高く、それは記述内容の質にはっきりあらわれているが)、全体として、発達に伴って自己否定的傾向が高まってき、青年期後期でプラトーに達すると解するのが妥当だと思われる。

表1 SCTにおける自己肯定的記述項目数(P)、自己否定的記述項目数(N)、及び自己肯定度(P-N)の平均値及び標準偏差(括弧内)

	男 子			女 子				
	n	P	N	P-N	n	P	N	P-N
中学生	19	1.53 (1.71)	2.32 (1.63)	-0.79 (1.60)	20	1.70 (1.72)	4.80 (2.50)	-3.05 (1.90)
高校生	14	0.50 (0.76)	2.00 (0.87)	-1.50 (1.00)	25	0.88 (1.01)	8.00 (3.40)	-7.12 (1.76)
大学生	9	0.67 (0.70)	7.11 (2.71)	-6.44 (1.78)	25	0.72 (0.89)	7.40 (2.59)	-6.68 (1.68)

ただし、このことは、自己対象化の発達の深化に伴う相対的自己否定化傾向をあらわしているとしても、自己に対する態度自体が否定的であるということは必ずしも意味していない。仮にそう呼んだが、「自己肯定度」が負であることだけで自己否定的だとは言えないからである。何故なら、SCTの刺激語は、その本来の使用目的に沿って、自己の否定的側面への注意を喚起するものが多く、従って否定的記述が多くなるのは当然である。

例えば、チェックリストを用いて、同様の主旨の研究を行なった加藤(1977)<sup>20</sup>は、年齢に伴う変化では今回のものとはほぼ同じ傾向を(特に女子で)得ているが、彼のいう「自己受容」性は「自己批判」性を有意に上まわっているという、今回の結果とはまったく逆の結果を示している。

従って、青年期の自己否定性そのものについての議論は、否定化へのbiasが殆んどかからないと考えられるTSTを用いた、後述の実験IIにゆずらなければならない。

ただし、SCTの幾つかの項目での結果から、家験IIの結果もまた否定性のある程度を示すのではないかと予測がなりたつ。例えば、「私はよく人から」、「私はよく」の両刺激項目に対する反応の分布は、表2に示す通りである。

いずれも中性反応が多数を占めるが、肯定反応は極めて少なく、否定反応を下まわっている。

## 2. SCTでの他者に対する態度

SCTにあらわれた、他者に対する評価の分布を、表3に示す。

1) 父親観(「私の父」): 年令間に有意差はない。全体的に肯定反応が否定を上まわる。この項目では、実は性差が認められるのだから、それは中性反応における差に基いている。

2) 母親観(「私の母」): 父親観と同じ傾向を示す。どの年令群でも、母親に対する評価が最も肯定的であった。

表2 「私はよく人から」、「私はよく」の刺激語に対する反応の分布  
(P:肯定, ? : 中性, N:否定, 数値は人数)

	「私はよく人から」			「私はよく」		
	P	?	N	P	?	N
中学生	1	35	3	0	34	5
高校生	3	28	8	1	27	11
大学生	0	28	6	0	25	9
計	4	91	17	1	86	25

3) 兄弟観 (「私の兄弟 (姉妹)」): 年齢間に有意差がみられる ( $\chi^2=9.62$ ,  $df=4$ ,  $P<.05$ )。中学生に比べて、高校・大学生の方がより肯定的である。どの群も中性反応が多いが、全体的に肯定的といえる。

4) 家族観 (「家の人は」): 肯定, 否定の分布に有意差は認められないが, 大学生で否定反応が肯定を上回るのがある, 他と比べて特異である。大学生は前記の父親, 母親, 兄弟観では肯定的であり, 「家の人」に対する反応とは対照的である。ちなみに大学生の「家の人」に対する反応分布と, 父親に対する分布との間には5%水準で有意差がみられ ( $\chi^2=6.40$ ,  $6.02$ ), 兄弟に対するそれとの間に10%水準の差がみられた。恐らく, 大学生にとって「家の人」とは, 個々の具体的存在の集合以上のもの, 即ち, より抽象的な「家」を意味しているのであろう。

5) 友人観 (「友だち」): 年齢間に有意差はない。いずれもかなり肯定的である。

6) 学校観 (「学校では」): 年齢間に分布の差がみられる ( $\chi^2=13.93$ ,  $P<.01$ )。中学に比して, 高校, 大学では否定的となる。

7) 世間観 (「世の中」): 年齢間の分布の差に有意性がみられる ( $\chi^2=14.07$ ,  $P<.01$ )。中学では否定反応が最多であるのに対し, 高校, 大学では中性反応が多く, 肯定反応は少なくなる。全体として否定的傾向が明らかである。

各項目を通してしてみると, 母親, 父親, 兄弟, 友人といった, 直接的に関わる他者 (significant others) に対しては, いずれも肯定的な反応が多いのに対して, 「家の人」に対しては中性的となり, 学校や世間といった, 一般化された他者 (generalized others) に対しては否定的となる。しかもその否定的傾向は加齢とともに増大する。

表3 他者に関する各刺激語に対する反応の分布 (数値は人数)

	「私の父」			「私の母」			「私の兄弟 (姉妹)」			「家の人は」		
	P	?	N	P	?	N	P	?	N	P	?	N
中学	10	23	6	19	17	3	4	31	4	12	18	9
高校	13	18	3	18	13	3	8	23	3	9	20	7
大学	14	15	5	14	14	6	13	16	5	5	19	10
計	37	56	14	51	44	12	25	70	12	24	57	26
	$\chi^2=2.93$			$\chi^2=2.49$			$\chi^2=9.62^*$			$\chi^2=3.36$		
	「友だち」			「学校では」			「世の中」					
	P	?	N	P	?	N	P	?	N			
中学	18	17	4	8	27	4	6	11	22			
高校	12	21	1	0	29	5	2	23	9			
大学	12	14	8	2	22	10	1	20	13			
計	42	52	13	10	78	19	9	54	44			
	$\chi^2=8.66^\dagger$			$\chi^2=13.93^{**}$			$\chi^2=14.07^{**}$					
	†: 10%レベル			*: 5%レベル			**: 1%レベル					

### 3. IPM 型質問紙における D 得点の分析

Laing の IPM 理論に関する総括的議論は, 前回 (堤, 1978) 行っているのだから, 今回は省略する。

ここでは, 自己の認知と, 内在化された他者の認知とのずれ (discrepancy) を表わす,  $ds-M$ ,  $ds-MM$ , 及び  $D$  の, 3つの指数の分析を行なってみよう。

まず, 3指数間の相関を被験者群ごとにみてもみると, 大学生の  $ds-M$  と  $ds-MM$  の間 ( $r=.52$ ,  $df=7$ ) を除き, いずれも非常に高い, 有意な相関を示している。従って, 以下は,  $D$  得点のみを用いて分析を進めていく。

各群ごとの  $D$  得点の平均を表4に示す。ANOVAの結果では, 性, 年齢, 交互作用のいずれにも有意性はみられなかった。個人差がかなり大きく, これを超える群間の差はみられなかったわけである。

次にこの  $D$  値と, 前述の ( $P-N$ ) 値との間に何らかの関連性がみられるだろうか。両者の相関を各群ごとに算出し, 表5に示す。

ここでは, 男子において特に際立った年齢差がみられる。しかもそれは, 加齢に伴って, 負の相関度を高めていくのである。

中学生男子の場合, 肯定度において, 肯定, 否定がほぼ相半ばしており, これはまた後述の TST でも確認されることになるのであるが, その分布は, 自己肯定的なものほど自他のずれが大きく, 否定的なものほどずれが小さいという, 一定の規則性を有していたことになる。このことは, 中学生の男子が概ね, 他者は自分のことを

表4 IPM型質問紙におけるds-M, ds-MM, 及びD得点の平均値及び標準偏差(括弧内)

	男 子				女 子			
	n	ds-M	ds-MM	D	n	ds-M	ds-MM	D
中学生	19	5.84 (4.00)	5.74 (4.34)	11.58 (7.84)	20	5.85 (3.23)	5.80 (3.64)	11.65 (6.56)
高校生	14	6.64 (2.79)	6.29 (3.12)	12.93 (5.59)	25	6.12 (2.40)	7.00 (3.42)	13.16 (4.87)
大学生	9	4.11 (2.32)	4.56 (3.05)	8.67 (4.69)	25	6.88 (3.31)	6.56 (4.07)	13.44 (6.64)

表5 IPM型質問紙におけるD得点とSCTにおける自己肯定度(P-N)の相関

	中学生	高校生	大学生
男 子	.57*	-.18	-.83**
女 子	-.05	-.27	-.17

\* 5%レベル \*\* 1%レベル

あまり高く評価していないと類推していることを示しているであろう。

一方、大学生男子は、自己を否定的にみる傾向がみられていたが、否定的である者ほど、自他のずれを大きく感じていたわけである。これは恐らく、大学生男子は、他者が思っているほどには自分をいいやつだとは思っていないということを示しているのだろう。他者のまなざしに囚われたまま「いい子」であり続けることへの抵抗をそこに読みとることが可能である。

## 実験II 20答法(TST)においてみられる自己対象化、自己に対する態度

### I. 目 的

前述のごとく、SCTでは、刺激語が反応に対して一定の否定的傾向を促す可能性があるのに対して、TSTの場合は記述の自由度が極めて高く、そのようなバイアスのかかる危険性は殆んど考えなくてもよいとみられる。

そこで、今度はこのTSTを用いて、青年期の自己対象化の拡がりや深まりをみると共に、それがどのような感情価をもっているか、調べてみたいと思う。

### II. 方 法

#### 1. 被 験 者

数名の不適當回答者を除き、以下のような被験者を分

析に用いた。

中学生群：公立中学校2年生、男子37名、女子40名  
計77名

高校生群：県立実業高校2年生、男子32名、女子40名  
計72名

大学生群：国立大学学生、男子28名、女子6名、  
計34名

看護学生群：県立高等看護学院1年生、女子28名、

なお、分析に際しては、大学生群と看護学生群はいっしょにして、大学生段階群(計62名)とした。

### 2. 手 続 き

被験者は“Who Are You?”という問いに対する回答を、「わたし(は、が、の etc)……」の形で、できるだけ20コ記述するよう要求される。

反応は、記述内容によって、表6に掲げる21のカテゴリーに、5人の評定者(心理学専攻生)の合議によって分類される。

さらに、それぞれについて、自己に対する評価の態度によって、肯定的(P)、否定的(N)、中性的ないし両価的(?)の3つに、同じ評定者によって分類される。評定者間の判定が分れる際には、分類不能や中性的反応として処理される。

### III. 結果と考察

20コの要求に対する被験者の反応数は、すべて10以上であり、約72%の被験者は、要求されたとおり20文記述していた。その分類の結果は以下の通りである。

#### 自己の範疇

予め設定した21のカテゴリーについて、少なくとも一度そのカテゴリーを用いた者の割合を算出して表6に示す。

全体的に、自己の内面性(精神的自己)に関する記述が多くみられた。例えば、性格特性や趣味、好みに関しては殆んどの人が、対人様式・志向性・心的状態に関しては半数以上の人が、少なくとも1度は記述している。次に多いのが客観的諸事実に関するもので、学校、家庭、性別、住民性、年齢などは3割前後の人が記述している。

ちなみに1人当りの平均使用頻度の上位2カテゴリーは、いずれも性格特性と趣味・好みであった(表7)。

次に年齢に伴う変化を $\chi^2$ 検定によってみてみると、男子と女子でかなり様相を異にする。例えば年齢の記述は男子で減少していくのに対し、女子では逆に増加す

表6 TST (20答法) において、少くとも1度そのカテゴリーを

カテゴリー	男 子			$\chi^2$ 検定 有意性	女 子			$\chi^2$ 検定 有意性
	中学生	高校生	大学生		中学生	高校生	大学生	
A 客観的諸事実								
性別	43.2	27.8	46.8		20.0	12.5	29.4	
年齢	43.2	27.8	14.3	*	7.5	22.5	32.4	*
名前	10.8	1.4	7.1		10.0	2.5	5.9	
人種・国籍	62.2	9.7	10.7	***	12.5	5.7	0.0	
生活圏	37.8	23.6	50.0		15.0	5.7	23.5	
家族関係	29.7	31.9	50.0		20.0	15.0	44.1	*
仕事	0.0	0.0	0.0		2.5	0.0	5.9	
学校	56.8	30.6	32.5		17.5	20.0	47.1	**
所属集団	24.3	18.1	28.6		22.5	10.0	5.9	
B 物質的自己								
身体的	73.0	61.1	67.9		60.0	62.5	41.2	
物的	10.8	9.7	32.1		7.5	5.0	8.8	
C 精神的自己								
趣味・好み	78.4	91.7	92.9		95.0	90.0	91.2	**
志向性	78.4	51.0	60.7		80.0	42.5	52.9	***
価値観	13.5	20.8	28.6		10.0	22.5	50.0	***
優劣感	21.6	11.1	21.4		5.0	10.0	5.9	**
心的状態	56.8	77.8	50.0		75.0	82.5	44.1	
性格	78.4	97.2	96.4	*	95.0	100	97.1	
対人様式	48.6	75.0	64.3		72.5	92.5	85.3	
実存的自己	21.6	0	14.3	*	10.0	5.0	20.6	
D その他								
生活状況の一般	21.6	25.0	32.5		35.0	22.5	26.5	
的記述	37.8	16.7	28.0		15.0	15.0	8.8	
分類不能								

\* 5%レベル \*\* 1%レベル \*\*\* 0.1%レベル

表7 TST において、1人当りの平均使用頻度の高い上位2カテゴリー(数値は平均使用頻度)

		1 位	2 位
中学生	男	趣味・好み (3.81)	性格特性 (2.97)
	女	性格特性 (4.65)	趣味・好み (4.48)
高校生	男	趣味・好み (4.88)	性格特性 (4.22)
	女	性格特性 (7.23)	趣味・好み (2.78)
大学生	男	性格特性 (5.43)	趣味・好み (4.29)
	女	性格特性 (5.91)	趣味・好み (3.26)

る。年齢のもつ重要性は、男子では青年期の初期に、女子では後期にあるのであろう。

男女を合計して、年齢に伴う有意な変化を示したのは、次の7カテゴリーであった。

増加したもの：家族関係、価値観、性格特性

減少したもの：人種・国籍

U字型カーブ：志向性、実存的自己

逆U字型カーブ：心的状態

#### 自己に対する評価的態度

今回の主たる目的は、TST にあらわれる自己に対す

表8 TSTにおける自己肯定的記述項目数(P)、自己否定的記述項目数(N)、及び自己肯定度(P-N)の平均値、及び標準偏差(括弧内)

	n	男 子			女 子			
		P	N	P-N	P	N	P-N	
中学生	37	2.57 (2.91)	2.76 (2.17)	-0.19 (3.79)	40	1.10 (1.10)	3.43 (2.75)	-2.33 (2.99)
高校生	32	1.63 (1.66)	2.00 (2.53)	-0.38 (3.16)	40	1.78 (1.97)	5.60 (3.84)	-3.83 (5.04)
大学生 段階	28	1.71 (1.74)	2.86 (2.65)	-1.14 (3.37)	34	1.12 (1.49)	4.15 (3.33)	-3.03 (3.61)

る態度が、青年期(後期)において否定的であるか否かをみることである。

自己肯定的記述項目数(P)、否定的記述数(N)、肯定度(P-N)の平均は、それぞれ表8に示す通りである。いずれも最大値は20である。

肯定度のANOVAでは、性要因にのみ有意性が認められた( $F_{1,205}=22.77, P<.01$ )。全体的に否定記述数の方がやや多かったが、その傾向は女子において大であった。ちなみに、否定的記述の多かったカテゴリーは、性格特性、心的状態、志向性などで、年長になるにつれて、対人様式(対他者関係)が増してくる。

女子に自己否定的傾向が大であるのはなぜだろうか。

用いた者の比率 (数値は百分比)

男 中学生	女 高校生	計 大学生	$\chi^2$ 検定 有意性
31.2	27.8	37.1	
24.7	27.8	24.2	
10.4	1.4	6.5	
36.4	9.7	4.8	***
26.0	23.6	35.5	
24.7	31.9	46.8	*
1.3	0.0	3.2	
36.4	30.6	46.9	
23.4	18.1	16.1	
66.2	61.1	53.2	
9.1	9.7	19.4	
87.0	91.7	91.9	
79.2	51.0	56.5	***
11.7	20.8	40.3	***
13.0	11.1	12.9	
66.2	77.8	46.8	***
87.0	97.2	96.8	*
61.0	75.0	75.8	
15.6	2.8	17.7	*
28.6	25.0	35.5	
26.0	16.7	17.5	

女性役割に対する社会的要請は、男性以上に「良い子」たることにかかるであろう。しかし「良い子」たることは人間に本来のものではない。この落差が、相対的な女性の自己否定傾向を生んだのではないかと考えられる。

また、SCT においてみられた年齢差が、ここではみられなかったのは何故か。

これは TST における記述の自由度の高さが、相対的な否定記述の減少とともに、個人差の拡大となってあらわれ、結果的に年齢要因を縮小してしまったのだと考えられる。しかも、今回のような分析方法では、自己同定の領域の拡がり、ある程度評価的反応 (の減少) に反映されるが、対象化の深まりは量的には反映されがたい。前者はどちらかといえば性差に、後者は年齢差に関係してくるものと考えられる。

年齢差は、むしろ自己記述の質に顕著にあらわれる。

個々の記述内容を見てみると、一般に年長になると内省化が進み、自己嫌悪的、自己懐疑的表現が増すと同時に、他者に対する意識と、自己の多重性の意識の覚醒がみられるようになる。

例えば、ある20才の大学生女子の回答は次のようなものである (抜粋)。そこには自己内省化の軌跡がよく表われている。

「わたしは、精神的にかなりまいっています。」

「わたしは今、自己を見失いかけてます。」

「わたしは今、何か生きがいを見つけなければならぬと感じている者です。」

「わたしは、人を信じることの必要性を痛感しました。」

「わたしは、これから強く生きなければいけません。」

その他、自己嫌悪、自己懐疑を表わす例としては、

「わたしは考え方が自己中心的すぎます。」(高校男子)

「わたしは、わたしがいやになることがちょくちょくあります。」(大学女子)

「わたしは、自分が善人か悪人かわかりません。」(大学男子)

「わたしは、自分自身のことが、時としてわからなくなる時がある。」(高看・女子)

他者への意識としては、

「わたしは、自分がきらわれてないかと思って、いつも気をつかいながら友達と話してるような女の子です。」(高校女子)

「わたしは、『他人がどう思うだろうか』といつも気にしながら行動します。」(高看女子)

「わたしは八方美人の気があります。」(大学女子)

「わたしは、相手のことを本気で考えて行動できる、そんな人間になりたい。」(大学男子)

最後に、

「わたしは、今が一番複雑な時だと思います。これを書いて少し心がすかっとした。」(高校男子)

「わたしはわたし、他のだれでもありません。」(大学男子)

## 結 び

今回は、青年期の自己対象化を、2つの文算完成法型質問紙 (SCT, TST) によって捉え、それを自己肯定的・自己否定的という次元で分析することにより、青年期の危機といわれるものへの接近を試みしてみた。

結果は、刺激語によって記述がある程度内省的に方向づけられる SCT において、発達に伴う自己否定化傾向が、また、そのような bias がかからないとみなしうる TST でも、わずかながら自己否定的傾向がうかがわれた。

人は本来、自己の否定的側面を直視するのは苦痛である。Rogers 流に言えば、防衛的機制により自己知覚は歪曲化されやすい。自己評価において、一般に自己に好意的な偏向が見られるという Wiley の見解について

は、先に述べておいた。加藤(1977)のチェックリストを用いた測定結果でも、青年はどちらかといえば自己肯定的であった。その意味で今回の結果が、顕著ではないにしろ、青年期の一定の自己否定化傾向を示したことは注目してもよいであろう。

肯定と否定、平安と不安の間を常に揺らいでいる青年の心理の影の部分を表象化させるには、評定法よりは文章完成法型の方がより秀れているのではないかと思われる。恐らく、日記の分析を行えば、今回の結果と同様な傾向がみられるのではないかと推測される。

自己対象化の深化に伴って、即ち、「見る自己」と「見られる自己」の分化に伴って、自己の否定的側面が可視的となる。

水面に映った己が姿に呪縛されたナルシスの表情は、もしかしたら、自己陶醉というよりむしろ苦悩の色をにじませていたのではなからうか。

確かに、自己否定観は時に青年を不適応行動へと向かわしめることがある。しかしながら、自己否定的であること、あるいは理想自己と現実自己のギャップそれ自体が不適応の指標となるわけではない。このことは、Rogersの自己理論の紹介において、時折誤解を招くような形で議論がなされることがあるので注意したい。Rogersが問題にしているのは、むしろ自己の否定的側面から眼をそらすこと、自己知覚の歪曲である。この歪曲化は、現実との接触の中で、必ずや何らかの齟齬をきたす。これがRogersの考える不適応である。従って、過度の自己否定も問題であるが、同時に過度の自己肯定もまた同様に不適応的である。自分のあるがままの姿を受け入れることこそが重要なのである(Rogers, C. R., 1951)<sup>21)</sup>。そして、この困難な課題が重要性を増し、Crisisとして立ち塞がる時期、それこそが青年期である。

青年期の危機については、今回の研究では必ずしも十分に接近しえたといえない。

身近に接する現代の青年たちも、極めて「健康」で屈託がなく、現実感覚に秀れているように見うけられる。

しかしながら、その奥にいかなる懊悩が隠されているか、知るよしもない。

筆者の接したある女子学生も、傍目には極めて明るく活動的で、誰にも好かれる好青年に感じられた。しかしよく聞けば、彼女も以前神経症の状態に落ち入り、神経科の門をくぐったことがあるという。

実証主義的心理学が、このような人間の内奥へどこまで接近しうるか、いささか心とない。

心理学的認識は、いかなる問いをかけるかによって大

きく規定されるが、それ以前に、認識者と認識対象の間の関係性によってまず規定されるのだということを痛感させられる。

## 参 考 文 献

- 1) Ickes, W. J., Wicklund, R. A. & Ferris, C. B., 1973, Objective Self Awareness and Self Esteem. *J. Exp. Soc. Psychol.*, 9, 202-219.
- 2) Freud, A. 1958, Adolescence. *Psychoanalytic Study of the Child.*, 13, 255-278.
- 3) Erikson, E. H. 1968, *Identity-Youth and Crisis*, W. W. Norton & Co. (岩瀬庸理訳 主体性—青年期と危機, 北望社)
- 4) Weiner, I. B. 1970, *Psychological Disturbance in Adolescence*. John, Wiley & Sons (野沢栄司監訳 青年期の精神障害 星和書店)
- 5) 山下 格 1977 対人恐怖 金原出版
- 6) 内沿幸雄 1978 対人恐怖の人間学 弘文堂
- 7) 岸本 弘 1980 青年期の思考と行動 国土社
- 8) Dixon, J. C. & Street, J. W., 1975, The Distinction between Self and Not-Self in Children and Adolescents. *J. Genetic Psychol.*, 127, 157-162.
- 9) Livesley, W. J. & Broomley, D. B., 1973 *Person Perception in Childhood and Adolescence*. Wiley (Burns, R. B., 1979, *The Self Concept-Theory, Measurement, Development and Behaviour*. Longman Group Lim. による)
- 10) Montemayor, R. & Eisen, M. 1977, The Development of Self-Conceptions from Childhood to Adolescence. *Development. Psychol.*, 13, 314-319.
- 11) Musgrove, F. 1966, The Social Needs and Satisfaction of Some Young People, Part II-At School. *Brit. J. Educ. Psychol.*, 36, 137-149.
- 12) Wylie, R. C., 1979, *The Self Concept Vol. 2. Theory and Research on Selected Topics*. (Rev. Ed) Univ. Nebraska Press.
- 13) Katz, P. & Zigler, E. 1967 Self-Image Disparity: A Developmental Approach. *J. Pers. Soc. Psychol.*, 5, 186-195.
- 14) Katz, P. A., Zigler, E. & Zalk, S. R. 1975 Children's Self-Image Disparity: The Effects of Age, Maladjustment, and Action-Thought Orientation. *Development. Psychol.*, 11, 546-550.
- 15) Hess, A. L. & Bradshaw, H. L. 1970, Positiveness of Self-Concept and Ideal Self as a

- Function of Age. *J. Genet. Psychol.*, 117, 57-67.
- 16) Laing, R. D., Phillipson, H. & Lee, A. R. 1966 *Interpersonal Perception—a Theory and a Method of Research*. Tavistock.
- 17) 堤雅雄 1978 青年期の自我の構造—レインの相互人格論をとおして 島根大学教育学部紀要 12, 11~17.
- 18) Orpen, C. & Bush, R. 1974, The Lack of Congruence between Self-Concept and Public Image. *J. Soc. Psychol.*, 93, 145-146.
- 19) Teichman, M. 1972. Cognitive Differentiation between Self-concept and Image of Self Ascribed to Parents in Boys on Berge of Delinquency. *Percep. Mot. skills* 34, 573-574.
- 20) 加藤隆勝 1977 青年期における自己意識の構造, 心理学モノグラフ, 14.
- 21) Rogers, C. R., 1951, *Client-Centered Therapy*. Houghton-Mifflin co. (伊藤博編訳 パースナリティ論, ロージャズ全集 8. 岩崎学術出版)